日本個性化教育学会
日本個性化教育学会報
第 44 号

発行
2024 年 9 月 7 日
発行責任者
加藤幸次

山形県の学校を訪ねて

放送大学客員教授　　浅沼　茂

先日、山形県の天童市にある天童中部小学校にお邪魔しました。子どもたちは、明るい大きな声で怪しい訪問者に挨拶をして迎えてくれました。不登校児が全然いないそうです。緒川小学校の実践を参考にされていたということでした。NHK の特集番組で、先生の証言が学力を心配しているというところで切れていたので、その真意を確かめたくて尋ねましたら、NHK の編集で本意を変えられたということでした。

山形と言えばいろいろな思い出があります。1970 年大学の 1 年生の時、講演に来ていた無着成恭氏に「あなたの教え子たちはその後どうなった」と無知な質問をしてしまいました。

実は、追跡研究は、多く周知の話でした。その後、米国留学中に、ウィリアム・パイナー主宰のカリキュラム雑誌にパイナーの自伝的方法と生活綴方を比較した論文を発表したら、世界のあちこちで評判になりました。この言い方は大げさではなく、後にイランに呼ばれテヘランでもイスファハーンでもその論文を読んでいる者がいたのを知ったときはびっくりしました。

山びこ学校の巻頭作文の江口江一の母の死に「バースト・イントー・ティアーズ」というような英訳は難しかったですが、それが伝わったのには驚きでした。

また、後にサンパウロでパウロ・フレイレの学会で日本の意識革命の実践として山びこ学校のことを紹介すると、日本の実践に驚いていました。10 年ほど前には山形の卒論生と一緒に山元村へ調査に行きました。無着氏のいたお寺にも行きました。当時の教え子の中学校の卒業生にも会いました。大きな家で甲冑や槍が屋根裏にありました。

２回目の訪問の時、佐藤藤三郎が来てくれました。無着との決別、山元中学校での学習の内容など尋ねてみました。総合学習の内容は、山びこ学校の作文に詳しく書かれていました。でも、今の山形の若者は、山びこ学校のことを知らない者が多いです。隣人への無関心は、おぼろげながら山形の歴史と風土に関係しているのだと思いました。

『山びこ学校』は生活綴方の金字塔のように多くの教育者から絶賛されてきました。けれども、無着に先立ち、国分一太郎という教師が、1930 年から山形市の北の方の東根町の長瀞小学校にいました。自由画の想画と生活綴方は、当時の自由教育として有名でしたが治安維持法などで、弾圧されました。東根市は、江戸時代の幕府の直轄領であったといいます。細切れでも山形には、まだまだ有名な作家がいました。

日本個性化教育学会

第 17 回全国大会
2024 年　8 月 3・4 日
（オンライン）

『個性化教育における DE&I（多様性・公正性・包摂性）の展開』

第 17 回全国大会は、2024 年 8 月 3・4 日、『個性化教育における DE&I（多様性・公正性・包摂性）の展開』のテーマで開催されました。2 日間を通し、講演・シンポジウムでは、各先生方から、新しい知見やこれからの指針となるご意見を頂戴しました。文部科学省初等中等教育局教育課程課長 武藤久慶氏には、膨大な資料をもとに、「なぜ令和の教育改革なのか、個別最適な学びなのか、GIGA スクール構想なのか」などについて講演いただきました。また、各分科会や自由研究発表でも貴重な報告や活発な質疑応答があり充実した会になりました。

今号では会員の皆様に全国大会の報告をいたします。

◆日　程

8月3日	9：45～10：00	開会行事
	10：00～11：10	基調講演「学習指導要領について－『これまで』と『これから』－」 武藤久慶（文部科学省）
	11：20～12：30	講演「社会的に公正な教育実践における緩さとジレンマの意味論」 澤田稔（上智大）
	13：30～16：30	分科会 1「子どもの学びの文脈を大切にする学校づくり」 コーディネータ：渡部力　（元東北文化学園大） 分科会 2「単元内自由進度学習の考え方・進め方 1」小学校を中心に コーディネータ：佐野亮子（東京学芸大） 分科会 3「英語教育における個性化教育の可能性」 コーディネータ：加藤幸次（上智大名誉教授） 自由研究発表１
	16：45～17：45	理事会

8月4日	9：30～12：30	分科会 4「研修を個別最適にする」 コーディネータ：藤本勇二（武庫川女子大） 分科会 5「単元内自由進度学習の考え方・進め方 2」中学校を中心に コーディネータ：佐野亮子（東京学芸大） 自由研究発表２
	13：30～16：30	シンポジウム「学校で DE&I を実現する戦略」 コーディネータ：奈須正裕（上智大） シンポジスト　：安居長敏（ドルトン東京学園中・高） 神野元基（東明館中・高）村田耕一（広島県教育委員会）
	16：30～16：40	閉会行事
	16：40～17：00	会務総会

講演：社会的に公正な教育実践における緩さとジレンマの意味論

上智大学教授　　澤田 稔

この講演では、社会的公正という視点から、今後の教育改革の方向性、あるいは、より望ましい教育実践像の明確化を図るための知見の紹介及び情報の提供を行いました。

公正(equity)という理念に関して言えば、第4期教育振興基本計画に“DE&I”（多様性･公正性･包摂性）という用語が登場しました。GIGA スクール構想にも「公正に個別最適化された学び」という表現が用いられました。

公正という理念への着目は、上記基本計画で導入されたウェルビーイングという概念とも地続きです。この概念は、OECD による近年の公式文書、あるいはその前に国連開発計画(UNDP)にも見られました。その直接のルーツは、インド出身のノーベル経済学賞受賞者で政治哲学者でもあるセン(Sen, Amartya)のケイパビリティ･アプローチと呼ばれる社会的公正論にあります。それは端的に言えば、多様性を重視した平等主義的視座を意味します。そこで講演では、このセンの理論の一端を紹介しました。

また、社会的公正＝社会正義(social justice)という理念に基づく教育論を展開してきた分野として、北米で1980年前後から目立った展開を遂げてきた「批判的教育学」があります。そこでは、不平等や差別など社会的に不公正な問題（の是正）と学校教育との関係が論じられてきました。この分野で参照される政治哲学者の一人にフレイザー(Frazer, Nancy)がいますが、社会的不公正の是正に向けたアプローチとして彼女が提示する再分配の政治・承認の政治・代表の政治という３本柱の教育学的翻案を、コンピテンシー（平等主義的な現代的能力形成）・インクルージョン（多様な子ども・若者の存在の肯定）・デモクラシー（集団形成・組織運営への子ども・若者の参加）という理念を柱とする教育論として紹介しました。

その上で、最近の会報でも述べたように、学習者の主体的な思考・判断・表現を重視するコンピテンシー・ベースの教育も、これまで排除されてきた（かもしれない）多様な背景・属性を持つあらゆる子ども･若者が包摂される公教育としてのインクルーシブ教育も、子ども･若者の自己決定･意見表明を重視するデモクラシー重視の教育も、従来型の学校の「きちんと･ちゃんと･しっかり」文化とは異なる「緩さ」が織り込まれる必要があるという試論を示しました。

さらに、こうした実践には「ジレンマ」が不可避であり、この「ジレンマ」を十分に自覚化すること、及びそれを積極的に受容して、暫定的・漸次的解決の積み重ねが重要であることを強調しました。

これらを踏まえた実践事例として、インクルージョンという理念を豊富に読み取ることが可能な単元内自由進度学習の実践事例、及び、米国におけるピース･コーナーの実践事例などを紹介しました。

シンポジウム：「学校で DE&I を実現する戦略」

コーディネータ：奈須正裕（上智大）
シンポジスト：安居長敏（ドルトン東京学園中・高）
神野元基（東明館中・高）
村田耕一（広島県教育委員会）

1 シンポジウムの趣旨

初めに、コーディネータの奈須正裕氏（上智大）から、シンポジウムの趣旨と進め方の説明、及びシンポジストの紹介がなされた。今大会のテーマである「個性化教育におけるＤＥ＆Ｉ」については、１日目の武藤久慶氏（文部科学省初等中等教育局）と澤田稔氏（上智大）の講演によって、政策的・原理的な解説がなされ、分科会において教育実践上の問題に関する論議が交わされたところである。シンポジウムでは、学校経営や教育行政に携わる実務家の方からそれぞれの取り組みをご提案頂き、その提案を手がかりにしてテーマに迫ることとする。

２　各シンポジストの提案の概要

（１）安居長敏氏（ドルトン東京学園校長）

多彩な教育上の実績に富む安居氏の提案は概ね以下の通りである。

◇ドルトン東京学園は国内唯一のドルトンプランを採りいれた中高一貫校であり、今年開校６年目である。「自由」「協働」の二つの原理に基づき、「アサイメント」（「契約学習」の時間）、「ラボラトリー」（「探究」の場）、「ハウス」（異年齢集団のグループ）の三つの仕組みを柱として、校舎内の空間設営の工夫等も含めた教育環境の整備を進めることによって、一人ひとりの知的な興味や旺盛な探究心を育て、個人の能力を最大限に引き出す教育活動に取り組み、「自主性・創造性を重視した学習者中心の教育」を展開している。

◇生徒の成長や能力の伸長を多面的に視覚化するために、評価ツールの「アイグロー」を活用して、自制心、実行力、協調性等の非認知能力の評価にも取り組んでいる。「失敗から学ぶこと」や「共感力・傾聴力」等との相関についてのデータが得られている。

（２）神野元基氏（東明館学園理事長・校長）

神野氏は起業家の経歴を持ち、人工知能型教材の開発者としても高名である。校長としての氏の提案の概要は以下の通りである。

◇東明館学園は 1988 年創立の中高一貫校である。歴史と伝統を踏まえつつも、少子化による生徒数の減少、社会の要請の変化等に対応すべく、2022 年度から学校としての新たな方向性・目標を打ち出し、様々な改革に取り組んでいる。その内容としては、まず、学校の全てのことの最上位目標として「生徒のウェルビーイングの実現」を掲げ、「好学愛知・自立自啓」であった学校の教育目標も「自律・自

走/相互承認/創造」にアップデイトした。また、カリキュラムの改革として、society5.0の時代に対応する力を養うために「総合選択制」を導入し、学びのスタイル別に設けられた縦割りのコースを選択して他年齢の生徒との交流を通して学ぶ仕組みを整えている。

◇教員の意識改革を進め、多様な子ども達を誰一人取り残すことなく様々な進路に向けて全力で支援することを共有している。

（３）村田耕一氏（広島県教育委員会主任指導主事）

村田氏は、県内公立小学校教員、県教育センターを経て、令和元年度から県教育委員会の「個別最適な学び担当」として、実証的研究事業に取り組んできた。氏の提案の主旨は概ね以下の通りである。

◇この事業を進めるに当たって次のような仮説を立てた。「子ども達は、自分の適性や実情に合った学び（＝個別最適な学び）ができないと学ぶ楽しさやできる喜びを経験できず、その結果として自己肯定感が低下し、主体的に学ぼうという意志が弱まってしまうのではないか。そうならば、子ども達に多様な選択肢と自己決定場面を提供すれば学びの好循環が生まれ、自己肯定感が向上し主体的に学ぶことができるのではないか。」そして、この仮説のもと、六つの小・中学校で、「自由進度学習」や「単元別プロジェクト学習」に取り組んでもらい、２年間の実証研究から、成果を示すデータを得た。この事業を通して強く感じたのは、教員の意識改革と理念の共有の大切さである。

※事例として廿日市市立宮園小学校が紹介された。

３ シンポジストとコーディネータによる協議

シンポジストから出された２点の質問を基に意見が交わされた。

（１）教職員間の理念の共有の方策

立場の違いやそれぞれの学校の実情により方策は異なるわけだが、シンポジストお三方の意見に共通していたのは、校長の姿勢・働きかけと、核になる人材の有無が鍵になる、という点であった。

（２）異年齢集団の構成の在り方やその意義

異年齢集団の編成に於ける年齢幅についての話題で、「『ハウス』では年齢の離れた子ども達の人間関係が良好になる」との事例が寄せられた。また、「子ども集団ではトラブルが起きるのは、ごく自然なことであり、それをどう解決していくかを学ぶ場としての機能・役割が学校にはある」という意見も出された。参加者全員にとって、改めて子ども集団、集団の中の子どもについて考える契機となった。

４ 会場からの意見・感想

幼児教育の立場から、「日本は（ドイツに比べると）発達や行動様式についての枠組みが規定されすぎている」、「幼児教育の場も主体的に個別最適な探究的な学びが行われ、トラブル等の場面を利用した社会性の基礎を学ぶ場ともなっている」等の話題が出された。

５　コーディネータによる「まとめ」

本学会で研究・論議している理念、理論、実践は、今後の教育の世界的潮流と同質のものと言える。現在、中央教育審議会でもこのテーマについて協議されている。今後の動向を注視していきたい。

（文責・神奈川・池田）

分科会１「子どもの学びの文脈を大切にする学校づくり」

コーディネータ：渡部力（元東北文化学園大）

話題提供：佐藤祐美子・西村春香（気仙沼市立面瀬小）

本分科会では、子供の学びの文脈を大切にしている学校の取り組みをもとに、教師の営みである指導を子供の学習に転換する際の考え方や要件について協議した。

１佐藤祐美子先生（気仙沼市立面瀬小学校長）

子供の学びの文脈を大切にする学校づくり

～共に学び、協働する教師集団～

(1) 校長の理念「ともに学び、協働する教師集団」を 4 つの指標で示し、教員の取り組みを支援する。

①本質を理解する力：校内研究で子供の成長を、実地踏査で地域のよさを共有する。②つながる力：学校外のひと・もの・こととの出会いを工夫し、子供の考えを深い学びに導く。③実践する力：教師自らが見出した課題と実践を称賛し、教科横断的な視点での校内研究の推進を支援する。④学び続け改善する力：子供の興味・関心を反映した年間指導計画に改め、教育の本質の理解に努める。

(2) 小中及び専門機関との連携が、教師と子供たちに新たな視点を与え、一人一人の探究を深めている。

(3) 人材育成等のビジョンを明確にした学校経営が、教師のエンパワメントを高め、子供の学びを等しく保障し、多様な考えを受け入れる学校をつくっている。

２西村春香先生（気仙沼市立面瀬小）

本気で考えたふるさと気仙沼の未来（総合的な学習の時間）　～対話を通して児童の探究が深まった１年間～

(1) 探究課題を自分事にするための工夫：

①思考ツールを用いて考えを可視化する。②子供の疑問や初発の課題について対話する。

(2) 思考ツール、対話による変容：

①考えを整理する方法を身に付けた。②したいことを話すようになり、探究課題になっていった。③担任は、子供たちの探究プロセスを予想でき、ひと・もの・ことへのつながりが考えられた。④学習が個別化する状況になった。

(3) 学びの連続性：

①様々な発表方法や発表の場を考え、アクションを起こした。②学校で、身に付けた学び方が生かされている。また、学習後に得られた新たな課題を探究活動に反映しているなどである。

３分科会後半での意見交換

(1) 対話について：①子供の学びの文脈を確かめることができる。②子供の暮らしを知ることで教材研究が変わる。③質の高い問いが生まれる契機となり、調べる活動が深い学習へと変化する。④「泥臭い学び」をスキップするスマートさがあり、情報を得やすい今どきの子供たちにふさわしい学び方かもしれない。

(2) 一人一人の問いと道筋に沿って支援するには、教師の介入のタイミングが重要になる。

(3) 管理職も授業者と同様に話し手の言葉に耳を傾け一緒に考える。

(4) 時代とともに問題が変化する。多様性・公正性・包摂性は、人権に収斂される教育の本質的な価値を基底にしている。**（文責・宮城・渡部）**

分科会２「単元内自由進度学習の考え方・進め方１」

コーディネータ：佐野亮子（東京学芸大）
話題提供：熊坂由美子・木村晶子（上尾市立尾山台小）
中原功博・斉藤晃・曽根原亮・金沢修那（飯田市立上村小）

小学校における単元内自由進度学習の報告から、実践導入の経緯や動機、実践の概要および準備の実際、授業でみられた子どもの姿や学びのエピソードと実践の成果などを共有しながら、子どもの多様な学びを支える授業の在り様（考え方と進め方）について、様々な角度から協議が行われた。

上村小（全校児童 24 名）**は**、10 年前から複式学年別指導に取り組み、子どもたちが学習リーダーとなり主体的・協働的に進める授業研究（教師の「見守り方支援」）を模索してきた。現在、1・2 学年、3・4 学年、5・6 学年の複式学級を編成し、全ての子どもたちを全教職員で支援するため、低学年から教科担任制を導入している。複式指導で子どもたちが進んで学び合う姿が見られる一方、悩んでいる途中で相手に委ねてしまう姿や友だちの考えに合わせる姿に課題を感じ、「一人学び」の充実を願って４年前から自由進度学習にも取り組んでいる。報告では高学年の図形領域の３つの単元と、全校児童による体育（マット遊び・マット運動）の実践が紹介された。

尾山台小（全校児童 156 名、全学年単学級・通常 6・特別支援 2）**は**、令和４年度から自由進度学習を導入している。児童の実態として、学力が低い児童が多い一方で市内上位の児童もおり、単学級でクラス替えがないため「できる子」「できない子」という意識が固定化しやすかった。そこで、「２教科同時進行」にして、全学年教室の隣を学年多目室として配置し学習場所を整備した。毎時間、取り組む教科も進度も場所も違うため、人と比較しないで自分の学習に集中できる姿が見られるようになってきている。

個の違いを意識して学習カードを複数作成し、学習環境からも学べるように準備すると、日頃は支援の必要な子が、自力で解答し丸付けする場面で笑顔をみせた。次の学習カードを取りに行く際、嬉しそうにスキップする姿は、「学校は楽しい」と体現しているようであった。それが「準備に苦労したが実践してよかった」という教師の実践継続のモチベーションとなっている。報告では、２年の国語（説明文）と算数（長さ）、６年の社会（歴史）と算数（対称図形）などの実践が紹介された。

各校の報告ごとに質疑を行い、全体でも協議の場をもうけた。課題や不安もあがったが、個性が輝き多様性を包摂する学校づくりを目指していくのに、単元内自由進度学習が求められていることを強く感じた。**（文責・東京・佐野）**

分科会３「英語教育における個性化教育の可能性」

コーディネータ：伊藤静香（帝京平成大）
話題提供：加藤幸次（上智大名誉教授）伊藤静香（帝京平成大）
村松麻里（金沢学院大）　横山稔史（東浦町立北部中）

村松先生からは、小学校段階の英語教育について英語の歌あそびと絵本を教材とした実践について話題提供があった。絵本の読み聞かせは、児童が絵を見て集中して英語を聞く活動の中で、教師の問いかけにより児童の好奇心が高まり想像力が引き出され、英語を通じたコミュニケーションが成立する。また、アメリカの小学校で使用されている、同一テーマについて言語能力のレベル別に内容が構成されている副読本は、子どもたちが自分のペースで学習を進めることが可能である。教科書に頼った一斉指導型の英語授業の枠組みから、小学校という英語教育入門期における歌や絵本を活用する実践と、英語指導の個別化のヒントが示された。

横山先生からは、中学校段階の英語教育において自由進度学習を取り入れた実践をご紹介いただいた。中学校の英語教育では、高校入試やテストのための学習も考慮しつつ、探究的な学びの活動を通じて、海外とオンラインで交流できるまでのオーセンティックな（本物の、現実の）英語を運用できることを目指す、複合的で challenging なゴールがある。その中で、一人一人が自らの学習方法を追求し、クラスメイトとの協働的な学習に繋がる指導方法は理想的である。また、基礎的な英語学習は教師の解説動画により各自で確認できる ICT の活用についても、従来の一斉指導の要素を入れた個別指導と学びの一体化が実現し得る実践であった。

加藤先生、伊藤の報告からは、韓国の英語教育では４技能育成の向上を目的とした徹底した指導により、韓国の教師も児童も流暢な英語を話し、ALT とのやりとりや児童からのアウトプットが積極的に行われている点で成果が上がっている一方で、ドロップアウトする学習者も増加していることから、集団主義の利点と限界が浮き彫りにされている点が指摘された。

韓国の英語の授業風景

Native Teacher の問いかけに
流暢な英語で発言が飛び交う

英語という教科の性質上、いかにして知識獲得と汎用性につながるオーセンティックな内容で授業実践が可能か。一斉指導の枠組みを超え、量的拡大から質的拡大へと指導方法の転換を考える上でのポイントや課題の提起とともに、英語教育と個性化教育の可能性が示唆された分科会となった。

（文責・東京・伊藤）

分科会４「研修を個別最適にする」

コーディネータ：藤本勇二（武庫川女子大）
話 題 提 供：甘利大紀（芦屋市教育委員会）
藤池陽太郎（南あわじ市立神代小）池住祐亮（大阪教育大附属池田小）

池住先生：『みんなで創りあげる学校の研究 －自らのフィルターを通す大切さ－』

学校の研究を創り上げる時に教師一人ひとりが持つフィルターを通すことで、自分の言葉で語れるようにすることを目指しているとの提案があった。研究主題と自分とのつながりが無意識に感じられるように教職員がたくさん話をするコミュニケーションの重要性を示唆してくださった。

藤池先生：『ワークショップ型研修で学校をつくる』

対話を中心としたワークショップ型の研修を行うことで、組織内に信頼が生まれたり、多様な視点から気付きが生まれたり、自発的な行動が生まれたり、組織によりよい循環が生まれるという提案があった。

必ず開催できる仕組みを作ることや、楽しいを大切にして、価値観を語れる場づくりの工夫について話していただいた。

甘利先生：『教師の主体性を信じ、委ねる研修 ～探究的な学び研究推進チーム【ONE STEPpers】の取り組み～』

芦屋市の、「徹底した自主参加」による研究推進チームである【ONE STEPpers】の取り組みについて、各自が自分の研究テーマに基づいて研究方法を選択し、教師同士のゆるやかな協働の中で、自分のペースで研究を推進していることを紹介いただいた。

後半は、チャットの質問や気付きも取り上げながら、教師の研修の考え方を変えていく手立てを共有することができた。研修主任の仕事は、当たり前を問い直すこと、そのためには互いの得意から学ぶことや参加を引き出すこと、弱さを出し合える場を作ること、グランドルール（事後検討会は、授業者の実現したかったことを大切にする、参加者は評価者でない、子供の名前で語る等）を決めることなどを確認することができた。先生は本来的に主体的な存在であることを自覚した上で、ゆるく関わっていくこと、教師の研修と子どもの学びは相似形なので、研修を個別最適にする具体的な手立てとそれに取り組む熱意を学ぶことができた分科会であった。

（文責・兵庫・藤本）

甘利先生の資料より

分科会５「単元内自由進度学習の考え方・進め方２」

コーディネータ：佐野亮子（東京学芸大）

話題提供：島﨑陽子（高島市立湖西中）　小坂亮太（尾道市立高西中）

本分科会では、中学校における単元内自由進度学習の報告から、実践の概要および準備の実際、授業での子どもの変容や教師のマインドセットの変動などを共有しながら、中学校での多様な学びを支える授業の在り様や実践づくりについて協議が行われた。

湖西中の島﨑先生は、昨年度まで市教育研究所の研究員として単元内自由進度学習を研究・推進し、今年度は現場にもどり自ら実践に取り組んでいる。数学科では少人数授業であっても時間を持て余す生徒や内容理解が追い付かない生徒がいる。別室で過ごす不登校傾向の生徒の学習保障も課題である。

こうした実態を踏まえて、少人数教室では掲示物や座席配置により多様な学びができるように、教室ではＩＣＴ活用により少人数教室と同様の情報が得られるよう環境整備をした。回数を重ねるごとに自分に合った学び方を模索する姿（例えば、友だちと離れて静かな環境を選ぶなど）が多くみられた。

また、休み時間から学習を始める生徒や、自主的に家庭学習を行う生徒もいた。指導者にとっては、生徒と関わる時間が増えて様子を見取ることができるため、学習の理解度だけでなく多面的生徒理解につながることを実感する機会となっている。

高西中は昨年度から「特別支援教育の考え方を生かした個別最適な学び」の取り組みとして、学習進度や能力、関心等に応じた多様な学びの選択肢を用意し、生徒が「自己決定・自己調整」できる単元内自由進度学習を行っている。多様な学びの選択肢には、①学ぶ場の選択→教室や廊下、他教室など学びに応じて選択できる、②学び方の選択→ＩＣＴを活用する、教科書ベースで進めるなどが選べる、③学ぶ内容の選択→プリントをやってから活動して確かめるか、活動してからプリントで確認するか課題によって選べる、④学ぶ進度の選択→個人の理解度、興味関心に合わせて進められるなどがある。

小坂先生は、理科室に、「アクティブコーナー」を設置し、何時でも何度でも実験や観察ができるようにした。さらに、活動が理科の学びや探究につながるよう、生徒を見取り教材研究をして、仮説を立てるための掲示物や学習プリントの工夫などを行っている。実践を通して「環境が整えば、子どもは学び出す」ことを実感している。

理科室にアクティブコーナーを設置

全体協議では、両校の取り組みには市研究所や県教委の「伴走型支援」が効果的に機能していることや、異教科の教員の意見や様々知恵をあつめてワクワクしながら開発する仕組みの重要性が指摘された。

自由研究発表

【1 日目】司会 藤本勇二（武庫川女子大） 箱根正斉（兵庫教育大附属小）

（１）**箱根正斉（兵庫教育大附属小）** 架け橋期における学びの価値の一考察

（２）**光田匠（奈良市立都跡小）** 対話的な学びを目指した授業とその分析
－個の学びをダイナミックに捉える－

（３）**篠田凌太（立命館小）** 小学校体育で自ら選択する学びと出来栄えの相互評価で実現する個別最適と協働的な学習の一体的充実がもたらす成果と課題の検討－小学校３年生における器械運動（マット運動）から施行する他単元へつながる新しい体育授業の提案－

（４）**松井香奈（大阪市立吉野小）・藤本勇二（武庫川女子大）**
「伝え合い交流する活動」を通して気付きの質を高める生活科 －栽培活動とおもちゃ作りからの実践分析－

（５）**賀本歩峰（西宮市立小松小）・藤本勇二（武庫川女子大）**
小学校理科におけるインクルーシブ教育導入への試み
－４年生『とじこめた空気や水』の実践を通して－

（６）**中西徳久（西宮市立甲東小）**
自ら学びを進める自由進度学習に取り組んで －自由進度学習に対する子供たちの評価－

【2 日目】司会 伊藤静香（帝京平成大） 浅沼茂（放送大）

（１）**伊藤静香（帝京平成大）** 韓国における小学校英語科授業実践
－４技能育成型指導とコンピテンシー・ベイスの授業構築にむけて－

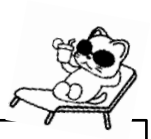
（２）**横山みどり（筑波大附属小）** 教科書と実際の生活場面とのギャップから学びを深める
－家庭科 物の使い方・買い方－

（３）**稲毛章（名護市立瀬喜田小）**
「学校ぐるみ」の個性化教育－全児童が行きたくなる学校を目指して－

（４）**菅原古鞠（上智大大学院）** 小学校 6 年生を対象とした「性の多様性」を扱った人権教育の成果と課題 -児童の人権意識の変化と実践における資質・能力に着目して-

（５）**植村利英子（川崎市立橘高）** 高校生が提案する“Diversification of Education”
－個性を大切にする教育を探究した生徒達の事例から－

（６）**浅沼茂（放送大）** 個別最適化と生活世界の自分史



事務局への問い合わせ 庶務部長 佐久間茂和
〒362－0064 埼玉県上尾市小藪谷 77－1 3－28－502
TEL 080－5429－1681
E-mail sakuma.shigekazu@jcom.zaq.ne.jp
日本個性化教育学会 HP https://koseika .com.

日本個性化教育学会 第 44 号
2024 年 9 月 7 日発行
編集責任者 事務局長 奈須正裕
編 集 中 澤 米 子

2023 年度　日本個性化教育学会　会計報告 2024 年 8 月 4 日(2024 年 3 月 31 日締め)

【収入の部】

項　　目		予　　算	決　　算	備　　考
会費	個人会費	400,000	680,000	4,000×170
	団体会費	7,000	7,000	7,000×1
前年度繰越金		1,066,299	1,066,299	前年度繰越金
研修会参加費		500,000	728,251	全国大会参加費
学会誌掲載協力金		30,000	45,000	学会誌掲載協力金(5,000×9 名)
銀行利子		0	6	
合　　計		2,003,299	2,526,556	

【支出の部】

	項　　目	予　　算	決　　算	備　　考
事業費	全国大会運営費	200,000	160,000	謝礼金・返金
	春季研究会運営費	50,000	102,352	雑費
	学会誌刊行費	500,000	468,450	会誌編集印刷・編集通信費
	広報活動費	200,000	134,971	会誌・会報発送・HP 運営費
	各地方個研活動補助費	200,000	200,000	東北・東海・関西・九州個研
事務費	郵送・通信費	150,000	43,448	国際郵便・ハガキ代等
	消耗品費	150,000	2,580	封筒印刷・ラベル等
	諸費	553,299	7,420	慶弔費・返金・手数料
合　　計		2,003,299	1,119,221	

○【差し引き残高】2,526,556−1,119,221=1,407,335

上記の通り決算報告いたします

会長　加藤幸次　　事務局長　奈須正裕　　会計部長　五十子晴美

以上相違ないことを報告いたします

会計監査　中澤米子　松本和平　(印章略・・監査承認ハガキを受理しています)

2024 年度　日本個性化教育学会　会計予算案

【収入の部】

項　　目		内　　訳	予　　算
会費	個人会費	4,000×170 名	680,000
	団体会費	7,000×1 団体	7,000
前年度繰越金		1,407,335	1,407,335
会誌論文投稿料		5,000×6 名	30,000
研修参加費			500,000
合　　計			2,624,335

【支出の部】

	項　　目	内　　訳	予　　算
事業費	全国大会運営費	夏の大会の運営	200,000
	春季研究会運営費	会場費・発表者交通費等	100,000
	学会誌刊行費	学会誌編集印刷・編集通信費等	600,000
	広報活動費	会報発送・ホームページ運営	300,000
	活動補助費	東北・東海・関西・九州個研運営補助	200,000
事務費	郵送・通信費	連絡通信費	100,000
	消耗品費	印刷・文具費	50,000
	諸　　費	弔電・手数料	74,335
	予 備 費		1,000,000
合　　計			2,624,335

会長　加藤幸次　　事務局長　奈須正裕　　会計部長　五十子晴美